

う。そして、不生産的（消費者）【労働】の結果に關する眞理が、——それが何であらうと、——吾々が富の増進を妨げるものを目指さずしてそれを進ませるに至るものを要求する爲めに、十分に知られるといふことは、確かに有利なことではなければならぬ。吾々自身をより安全な地位に置かんが爲めに、不生産的消費者の減少に關して何が爲されてよいことと考へられようとも、若し吾々が、この減少によつて吾々は労働階級に直接的救済を興へてゐるのであるといふ印象によつて、せき立てられないならば、吾々はより慎重に進むに至るであらう。

現在の如き時期に於いて労働階級に助力せんとする吾々の努力に於いて、彼等を「不生産的労働に、又は少くとも」道路又は公共事業といふが如きその結果が市場に賣りに出されない（種類の）労働に、使用することが望ましい、といふことを知るのも重要である。租税で徴収した大きな金額をかくの如く使用することに對する反對論は、それが生産的労働に使用せられる資本を減少する傾向があるといふことではないであらう。蓋しこのことは或る程度迄は正に欲求されたることであるからである。併しそれは恐らく、労働に對する國民需要の不足を餘りにも隠蔽し、そして人口が需要の低減に徐々として適合するのを妨げる、といふ結果を伴ふであらう。併し乍らこのことは可成りの程度に、與へられる勞賃によつて、是正せられるであらう。そして全體として私は、道路及び公共事業への貧民の使用と、地主及び財産家の間での建築を爲し彼等の土地を改良し美化し且つ労働者や召使を使用せんとする傾向は、競争が維持してゐた陸海軍兵士や其の他の階級を突然生産的労働者に轉換することから惹起された生産物と消費との均衡の攪亂より生

ずる害悪を救済する所の、最も多く吾々の能力の範圍内にあり且つ最も工夫された手段である、と云ひたいのである。

若し、これ等の三原因が別々にか又は一緒に作用することによつて、吾々が、全生産物の交換價值を増大する様に、供給と（需要）【消費】とをして相互により有利な比例をとらしめ得るならば、利潤率は永続的に耕作されてゐる土壤の性質並びに耕作者の現實の熟練が許すだけ高く騰貴し得ようが（二版註）、これは現在では事實と全く反することである。そして資本家が、支出を減少してではなしに、着實な且つ上進せる利潤から貯蓄し始め得るや否や、換言すれば、地金で、且つこの地金の【國の内外の】労働に對する支配力で測定されたる、國民収入が、年々且つ着實に増大し始めるや否や、吾々は安全に且つ有効に、吾々の失はれたる資本を、吾々の増大せる収入の一部分をそれに追加する爲めに貯蓄するといふ通常の過程によつて、恢復し得よう。

一版註 資本の利潤は（R註）土地の状態が許す以上には高くあり得ないが、併しそれはそれ以下にはどれ程でもあり得よう（三〇〇頁を参照）。（譯者註——第一版の第五章第一節の最後のパラグラフ）この點に關するリカード氏と私の大きな相違は、リカード氏は利潤は土地の状態によつて規制されると考へ、私はそれは單に一方でそれによつて制限されてゐるに過ぎず、そして若し資本が貨物に對する需要に比較して過剩であるならば、利潤は、土地の肥沃度にも拘らず、どれ程でも低くあり得よう、と考へることである。

R註 若しマルサス氏が、私は、吾々がなほ肥沃な土地を豫備として有つてゐる間は、利潤は常に高くなければならぬ、と主張するものと、想像するならば、彼は大いに誤解してゐることに

なる。私が百回も云つた如くに、利潤は、若し勞賃が高いならば、低く、そして勞賃は、土地に極めて豊富な資源があつても、極めて高くあり得よう。

紙幣の自由發行程間もなく且つ急速に國の收入と消費とを増大するものはないといふのが、惟ふに、多くの人々の間の、特に商業階級の間の、意見である。併しこの意見を把持するに當つて、彼等は、國民的富が疑ひもなく時に通貨の價值の下落より得る大なる利益の性質を、誤解してゐる。この下落の特別の結果は、固定所得を有つ者から財産を奪ひ、そして賣買する者に國の生産物に對するより大なる支配力を與へることである。國民的支出の状態が、それに供給する困難があるといふ程度である時には、生産物のより大なる比例を資本家の手に歸せしめる傾向あるものは總て、生産力を増大せずにはおかぬと同様に、欲求せられたるものを正に供給するに至るものでなければならぬ。そして、この場合の直接的必要以上に出づる兌換停止法の繼續は固定所得の所有者に對する積極的不正行爲以外のものであるとは殆んど考へ得ないけれども、而も、貨幣價值の下落とそれが齎らす信用の便宜とは、上述の如くに作用して、同一の程度には恐らく今迄如何なる國民の歴史にも起つたことのない莫大な資本の破壊の急速な恢復に大いに寄與した筈であることは、「私は」殆んど疑ひ（がない）得ない。

併し吾々が今同様の紙幣發行を爲すとすれば、結果は極めて異なるであらう。恐らく通貨の突然の増大と借入の新らしい便宜とは、如何なる事情の下に於いても、取引に一時的刺戟を與へるであらうが、併しそれは單に一時的に過ぎないであらう。政府の側に於ける α 甚大なる支出と、收

入への資本の頻々たる轉換なくしては、資本家によつて獲得せられた大なる生産力は、固定所得の所有者によつて所有せられる購買力の減少に影響を及ぼしつゝ、必ずや現在感ぜられてゐるよりも更に大なる貨物の供給過剰を惹起すこととなるであらう。そして經驗は十分に、紙幣はかかる事情の下に於いては價格を維持し得ないことを、示してゐるのである。我國の紙幣發行の歴史に於いて、通貨の豊富又は稀少は（一般に）高き又は低き價格に隨伴し且つ加重したが、併しそれを齎らしたことは稀であるか又は決してないことが、見出されるであらう。そして、戰爭の終りに、通貨の收縮が始まる以前に價格が下落したのを、想起するのは、最も重要なことである。地方銀行を破産せしめ、そして吾々に我國の紙幣の過剰の基礎の脆弱なるを證示したのは、實際この價格下落であつた。この突然の收縮は疑ひもなく商人及び國の慘苦を著しく加重した。そして正にこの理由によつて、吾々は將來に於けるかゝる事件を避ける爲めに吾々の全力を盡さなければならぬ。併し乍ら、同時に正義の法則にも供給及び需要の大原理にも反して、紙幣の強制的發行によつて價格を維持せんとする無益な努力によつてではなく、併し着實に我國の紙幣をそれが代表すると公言する鑄貨と同一價值に維持し、そして貴金屬に屬する變動以外の變動を蒙らせないといふ、唯一の有效な方法によつて。

R註 こゝではマルサス氏の特異な意見はすつかりあからさまになつてゐる。

本書の終りの方で述べられた所の、すなはち富の増進は比例に依存するといふ、主たる學說に關しては、恐らくそれは必然的にこれ等の諸命題に關する意見の相違への道を開き、かくて經濟

學に、それに屬すると想像されてゐなかつた一種の不確實さを、投げ與へる、と反對せられるであらう。併し乍ら、若しこの學説が、十分な検討を経た後、眞實なることが見出されるならば、若しそれが事物の現状を適當に説明し、そして何故に將來に關して頻々たる誤りが爲されてゐるのかを首尾一貫して説明するならば、かゝる反對者は答辯せられたことになることが認められるであらう。吾々は一科學を吾々の希望や意見によつてより確實にすることは出来ない。併し吾々は明かに、一科學を、それが事實さうではないものであると信ずることによつて、其の適用に於いてより不確實ならしめるであらう。

併し乍ら、吾々は富裕になる爲めの或る通則を作り、そして一國民は、富に於いて、それが其の收入から貯蓄しそして其の資本に追加すると同程度に、増大するものである、と云ふことは出来ないけれども、而もこの科學の最も不確實な部分に於いてすら、生産と（有效）消費との比例に關する部分に於いてすら、吾々は指導なしにおかれてゐる譯ではない。そして若し吾々が需要及び供給の大法則に注意するならば、それは一般に吾々を正しい軌道に導くであらう。リカアドウ氏は正當に曰く、『農業者や製造業者は、恰も勞働者が勞賃なくして生活が出来ないと同様に、利潤なくば生活が出来ない。蓄積に對する彼等の誘因は、利潤の減少ある毎に減少するであらう。そしてそれは、彼等の利潤が餘りに低く、彼等の勞苦に對して、及び彼等が彼等の資本を生産的に使用するに際し必然的に遭遇しなければならぬ所の危険に對して、相當なる報酬を彼等に與へない時には、全く停止するであらう。』(註)リカアドウ氏は(註)土地の状態によつて惹起される

最終的且つ必然的の下落に、この章句を適用してゐる。私はそれを總ての時代に、耕作の最初の段階と最後の段階との間に介在する總ての各様の時期を通じて、適用し度い。資本が餘りにも急速に増大する時には常に、蓄積への誘因は減少する、そしてより多く支出しより少なく貯蓄するの自然的傾向が生ずるであらう。利潤が騰貴する時には常に、蓄積への誘因は増大し、そして利得のより小なる部分を支出しより大なる部分を貯蓄するの傾向が生ずるであらう。これ等の傾向は、個人に影響して、彼等が悪法や不賢明な教訓によつて妨げられなければより一層頻々と到達すべき正當な中庸に彼等を導くであらう。若し彼れの所得から貯蓄する凡ゆる者が必然的に彼れの國に對する友朋であるならば、彼等の所得を支出する總ての者は、浪費者の如くに、絶對的敵ではないであらうけれども、彼等の國を利益し且つ勞働階級を雇傭するの義務を、それが彼等に出来る時に行はないものと、考へられなければならない。そして彼等の家や家具や馬車や食卓への支出の程度が眞の愉樂を殆んど全く犠牲にすることなくして確かに大いに節約せられ得るが如き者には、これは氣持のよい考へではあり得ない。併し若し實際上は、その時期の事情によつて貯蓄は國民的利益でもあれば國民的不利益でもあるならば、そして若しこれ等の事情が利潤率によつて最もよく表明せられるならば、確かにそれは個人的利害が外部の助力を必要としない場合である。

註 Princ. of Polit. Econ. ch. vi. p. 127. (譯者註—前掲譯書、一二五頁)

R註 こゝでも亦マルサス氏は私を誤解してゐる、そして私は、これが私の學説ではなく、彼が

何等の正當な根據なしに私が主張してゐるものと想像してゐるものであることを、證示する爲めに、三二六頁に於ける譯者註第一版の第五卷第四節の冒頭私の意見の彼自身の記述を参照せられんことを望む。マルサス氏は、貯蓄するといふことは、彼が専ら費消と呼ぶものと同様に確實に、支出するといふことであるのを、記憶してゐるとは決して思はれない。

貯蓄は、前述の如くに、多くの場合に於いて、極めて神聖な私的義務である。この義務の意味、及び人類の胸中にかくも根強く植ゑつけられてゐる吾々の境遇を改善するの願望が、時に、又或る社會状態に於いて、公けの富の發展に對する最も有效な奨励と一致するよりもより大なる節儉への傾向を、どれだけ齎らすかは、云ふの困難なることである。併しこの傾向が、放任せられたる時に、過大にならうと否とを問はず、何人もそれに、それが調子外れの時でさへ、干渉を加へることを考へ得ないであらう。併し乍らそれを公けの義務と呼ぶことによつて、より以上の賞揚を與へる理由はない。國民資本に對する市場は、他の市場と同様に、愛國心の助けなくとも、充たされるであらう。そして貯蓄のR註全問題を個人的利害と個人的感情との干渉されざる作用に委ねれば、吾々は、諸國民の富は、凡ゆる者に、彼が正義の通則を遵守する限り、自由に彼自身の利益を追及するを許すことによつて最もよく確保せられるといふ、殆んど例外なき一般の公理を吾々に教へる所の、アダム・スミスによつて打樹てられた經濟學の一般原理に、最もよく一致することであらう。

R註 誰が嘗てそれをそれ以外のものに委ねようと云つたのか？

更になほ、この學說こそは、そして上來論じて來た本書の主たる諸學說は、總て、緒論に於いて述べたる如くに、經濟學は數學よりも倫理學及び政治學により類似するものなることを、證示する傾向あることを、認めなければならぬ。併しこの眞理は、其の確實性では缺ける所があるが、其の重要性では缺ける所はない。經濟學が社會の福祉と最も密接な關係を有つ問題の若干を含む間は、それは常に最高の興味ある論題でなければならぬ。其の研究は大なる實用性のあるものであり、又積極的害悪を大いに防止するに役立つものである。そして若し其の諸原理が注意深く十分に擴充された經驗の上に置かれるならば、それ等が既に爲したる所からして、正當に適用される時には、それ等は吾々の正當な期待を失望せしめることは稀である、と信ずる十分な理由を吾々は有つのである。

本書の後の部分の諸學說に對し恐らく爲されるであらう所のもう一つの反對論があるが、それは私がかゝる反對論を蒙らない様に豫め手段を講じて置くことをより熱心に考へてゐるものである。若し私が樹立した諸原理が眞實であるならば、租税の突然の廢止は、屢々、特に社會の勞働階級に對し、一般に期待せられてゐるとは極めて異なる影響を伴ふであらう、といふことに確かになるであらう。そして恐らくこの結論から、課税に賛する推論が爲されるであらう。併しR註それから得られる正當な推論は、租税は課せられてはならず、又はその場合の必要が正當とする以上の額に迄課せられてはならず、そして特に、國民的名譽と安固と矛盾することなく、それが破壊を齎らさずしては進み得ず又慘苦を齎らさずしては停止し得ない程大なる程度の支出を妨げる

爲めに凡ゆる努力が爲さるべきである、といふことである。

R註 併しもう一つの正當な推論は、それは若しひと度課せられるならば撤廢せられてはならぬといふことであり、そしてそれを課するのは屢々賢明なことであらうといふことにもなる。若し人民が自分で十分に支出しないならば、彼等の爲めに支出する様に國家に要求する以上に便宜なことがあり得るか？ 若しマルサス氏の學說が眞實であるならば、兵士を増大し、政府の總ての官吏の俸給を二倍とする以上に、賢明なことがあり得るであらうか？

假令、莫大なる公けの支出とそれを支持する爲めに必要な課税との刺戟が、異常なる生産力に影響して、特有の事情の下に於いて、一國の富を、然らざれば増大すべかりしよりもより大なる程度に増大せしめることが、認められるとしても、而も最大の生産力も終には過剩借入によつて壓伏されなければならず、且つ吾々がその儘進まうと又は元へ戻らうと努めようと、勞働階級の間の窮乏の増大がその結果起らなければならぬ故に、社會にとつてはかゝる富が初めからなかつた方が遙かによりよかつたであらう。それに伴つてR註確かに消耗が生ずる故に絶對的に必要である譯でないならば凡ゆる手段を講じて避けなければならぬ所の或る猛烈な刺戟によつて惹起された不自然な體力に、それは類似するのである。

R註 併し吾々はこの刺戟の力の下にあるのであり、それを中止するの愚に惱んでゐるのだ。私の諸原理はこれと全く反對の結論に導く。國債を國の資本で支拂ふか、又は公債所有者に原本か利子かの支拂を拒絶することによる、國債の全廢は、一般にそれが有つと考へてゐる結果を

生じないであらう。公債の全廢の後に吾々は以前よりもより多くの資本又は収入を有つことはないであらう、それは單に異つて分配されるに過ぎないであらう。公債の支拂が吾々を大なる課税の負擔から免れさせる限りに於いて、それは、資本を我國からかゝる負擔のない他國へ移さうといふ誘惑を、減少するであらう。それは、吾々を、租税の害惡を加重する所の、徵稅吏や收入吏や現在國の勤勞から支持されてゐる密輸入者から、免れさせるであらう。多くの他の附隨的の諸利益が生ずるであらうが、これを今一々列挙するのは便宜ではないのであらう。

『人口論』に於いて私は次の如く云つた、『人生の出來事の全範圍に於いて、不作の最初の回歸により又は平年作によつてすら必然的に壓伏されなければならぬ所の、二三年の豐作による人口増加の突然の開始以上に、窮乏の豊かな源泉があり又は不幸な結果を普く産出す源泉があるかどうかを私は疑ふ。』(註)戰爭中に起つた勞働に對する大なる需要は、正に同様の種類の結果を有たざるを得ず、而も唯長期に互つたが爲めに加重せられたのみであつた。そしてこれは其の性質上繼續し得ない事態であるから、若し總ての政府がその人民の幸福に對し何等かの考慮を拂つてゐるならば、出來得る限り總ての戰爭と過剩の支出とを避けるのが、明かに總ての政府の義務である。併し若し戰爭が避け得ないならば、戰爭中人民に最も壓迫を惹起さず、且つその終結の際に必要な状態に最も混亂を惹起さない様に、必要な支出を統制するのが、その義務である。吾々は、かかる課税と消費とが凡そ發生し、そして單に一時的たり得るに過ぎないかくも大なる刺戟が國の富と人口とに與へられたことを、歎く十分の理由がある。併し、害惡を招いた以上は何が最上

の救済策であるか？ といふことは極めて異なる問題である。若し數年の豐作の間に人口増加が始つてゐたとすれば、吾々は確かに、輸入によつて、平年作の突然の回歸によつて惹起さるべき窮乏を妨げる爲めに、大きな努力をしなければならぬ。若し人體が極めて力強い刺戟を蒙つてゐたとすれば、吾々は確かに注意深くそれを餘りに突然除去しない様になければならぬ。そして若し國が不幸にも長期間に亙る過剰な支出の刺戟を蒙つてゐたとすれば、其の直接の救済策を大きな且つ突然の消費の收縮に求めるのは、確かに總ての類推と總ての一般的原理とに反することではなければならぬ。

註 Vol. II, p. 170. 4th edit.

社會の勞働階級は、彼等がかくも熱烈に希望してゐる様に思はれる目的を達することによつて、手痛い打撃を受けるであらう、と信ずる凡ゆる理由がある。固定所得によつて生活する者には、免税が大きな且つ純粹の福利である。商業取引階級には、それは事情によつて時に福利であり時に害悪である。併し勞働階級には、租税の廢止も如何なる程度の穀物の低廉も、勞働に對する需要の缺乏を相殺し得ない。若し勞働に對する一般的需要が不足し、特に若しその不足が突然であるならば、勞働階級は低物價の眞唯中に於いても窮乏に陥るであらう。若し勞働に對する需要が大であるならば、彼等は高物價の眞唯中に於いても比較的富んでゐるであらう(三版註)。

二版註 勞働に對する需要がない時には、食物の價格が如何に低からうとも、勞働階級は單にそれを慈善によつて得ることが出来るに過ぎない。

これ等の事實を述べるのは租税に賛せんが爲めではなく、それに反對する最も有力な理由の一つ、すなはちそれは常にその最初の賦課に當つて大なる害悪であるのみならず、更に後に至つてそれより免れんと企ては屢々新らしい苦惱を伴ふ、といふことを云はんが爲めである。それは、有害であることは認められても可成りの中間期により、大なる害悪を産出することなくしては廢止せられ得ない所の、アダム・スミスの指摘せるマアカンティル・システムの不當な規定に、類似してゐるのである。

理論家は餘りにもその考慮に於いてかゝる中間期を看過し勝ちである。併し屢々回歸する八年又は十年は人生に於ける重大な期間である。それが好況なるか又は不況なるかによつてそれは多量の幸福にもなれば窮乏にもなり、そしてその終結の時には國を極めて異なる状態に置くこととなる。好況期には、商業階級は屢々、彼等を將來に對し確保するに大いに役立つ財産を實現する。併し不幸にも勞働階級は、一般的好況を共にするとはいへ、不況を共にする程度には好況を共にしない。彼等は勞賃下落の時期には最大の慘苦を蒙るであらうが、併し勞賃騰貴の時期によつて適當に補償せられ得ない。彼等には變動は常に福利よりも害悪をより多く齎らさなければならぬ。従つて社會の大衆の幸福の爲めに、出來得る限り、平和を維持し且つ均等な支出を維持するのが、吾々の目的でなければならぬのである。

譯者解題

この譯書は、上卷の凡例に於いて述べた如くに、マルサスの『經濟學原理』の第一版及び第二版に、リカアドウの遺稿『評註』を附したものである。(序に一言すれば、マルサスは本當はモオルタスと云つた方がよいらしい(註)が、併し今は英國人として一般に云つてゐない。)この三者の關係は次の如くである。

フランス革命(一七八九年)に續く二三十年間は、常に政治的にのみならず、又經濟的にも、英國にとつて重大問題が累積した時期であつた。後者に關する諸問題としては、例へば穀物條令とか貨幣制度とかの問題がある。かうした時事問題に關して幾多の論者がその見解を發表したが、併しこの時事問題の討論は、當然豫想せられるが如くに、かゝる討論の根據となるべき比較的抽象的な基礎理論の討論へと導いた。かくて討論の中心題目は、例へば穀物條令は撤廢すべきや否やとか、紙幣の價值下落の對策如何とかいふ如き、具體的な時事問題から、商品の價值を規定するものは何ぞやとか、地代を支配する原理は何ぞやとかいふ如き、抽象的な理論問題へと、移行した。そしてこの後者を代表する論作がリカアドウの『經濟及び課税の諸原理に就いて』(第一版一八一七年、第二版一八一九年、第三版一八二一年)である。

このリカアドウに對する最大の論敵はマルサスであつた。彼は一七九八年に『人口論』の第一

版を著して以來終世その改訂を怠らなかつたが、その間に又多數の經濟學上の著書及びパンフレットを著してゐる。その中で内容から云つても分量から云つても最大のものが、こゝに譯出した『經濟學原理』(第一版一八二〇年、第二版一八三六年)である。

マルサスとリカアドウとの經濟學上の論争は印刷されたものの上でのみに限らなかつた。それは私信にも及んだ(註三)。恐らく、マルクス・エンゲルスの場合を除いては、リカアドウを中心とするこの私信程、經濟學史上で重要な私信はないであらう。兩者の交友の始つたのは一八一一年の六月であり、その時マルサスが自らリカアドウに交りを求め、印刷物による時間のかゝる討論よりも私信又は會話によるそれを以て、兩者の異見につき論議を闘はさう、と申出たものと云はれてゐる(註三)。その後兩者の交遊は終世變る所なく續いたけれども、而も兩者の間に存在した理論的間隙は終に最後迄除去せられなかつたのである。

マルサスはヘイリベリの東印度大學で經濟學を講じて居り、その講義の一部分は『地代の性質及び増進』(註四)といふ名で一八一五年に出版されてゐる。併しそれは講義の全部の中の僅かに一部分であつた。そして彼がその全部を整理改訂して出版する決心になつたのは、一八一七年にリカアドウの第一版に接してのことであつた。リカアドウのこの書は、兩者の討論に屢々登つた問題に關する彼自身の見解を、一應まとめて見る、といふ積りのものであつた。マルサスはこの書を読み、そこで自分自身も亦リカアドウの所説と對立するその見解をまとめようと思つて、筆を取つた。そして右に記した講義を基礎とするその原稿は一八一九年の末に完成し、それは一八二〇年に世に現れたのである。

〇年に世に現れたのである。

このマルサスの『經濟學原理』はリカアドウの側に於ける二つの大きな反響となつて現れた。その一つはマルサスの批判に對し自己をよりよく防衛せんと目的を以て行はれたリカアドウの『經濟學』の改訂であり、これは翌二一年に第三版となつて世に現れた。その二は本譯書に収録せる『評註』であり、これはマルサスの『經濟學原理』につき、リカアドウが問題とする文又はパラグラフの最初の二三語を先づ書取り、又稀には彼が問題とする語そのものを書取り、これに彼れの評論を加へたものである。(従つて本譯書にR註とある所は、R註なる語の存在する文又はそれに始るパラグラフに關説するものであり、又稀にはその前後のパラグラフ、或はR註なる語の直前の語に、關説するものである。その場合場合によつてその何れであるかは容易に判斷し得るであらう。)リカアドウは初めはこの『評註』を自己の『經濟學』の附録に収録する豫定であつたが、併し彼れの友人のジェイムズ・ミルがこれに反對し、マカロックも亦これと同意見であつたので、終にその最初の計畫は中止された。

この評註はリカアドウの友人達の間で廻覽されたが、マルサスも亦一八二一年にこれを、而も可成りに長期に亘つて、讀むことが出来た。そして一つにはリカアドウの第三版、又一つにはこの『評註』を念頭に置いて、彼れの『經濟學原理』の改訂を試みようと思つた。併し一八二三年には『價値の尺度』(註五)を著し、一八二四年には『救貧法』と『人口』とに關する長大な論文(註六)を『大英百科全書』に寄書し、一八二五年及び二七年には同じく長大な價値に關する論文(註七)を

王立學術協會で發表し、一八二六年には『人口論』第六版を出版し、一八二七年には『經濟學に於ける定義』(註八)を著すといふ、マルサスの多忙によつて、この改訂の仕事は遅々として進まなかつた。併し一八三四年の末にはこの改訂の仕事は略々成就してゐた。併し同年末十二月二十九日にマルサスは突然この世を去つたので、彼は終にこの書の第二版の公けにせられるのを見ずして終つた譯である。彼が世を去つた時にこの改訂が略々終つてゐたことは、本譯書上卷の卷頭に收録した編者の注意によつて知ることが出来る。編者はマルサスの學生時代からの友人たる僧正オターである。

以上が謂はばマルサス『經濟學原理』の第二版が現れる迄の其の『傳記』である。その後の本書の『傳記』は著しく對照的な二つの點を特徴とする。すなはち十九世紀を通じて且つ二十世紀に入つても極めて最近に至る迄の一般的無視排斥と、一九三〇年代に至つての素晴らしい『復興』『復位』と。

無視排斥の時代とても何人もこれに觸れなかつた譯ではない。併し多くは經濟學史に關する著書が、而もリカードウを説明する目的で、謂はば刺身のつまとして、これに觸れてゐるだけである。ポナアの『マルサスと彼の業績』に於いてすら、『人口論論が主要論題であり、經濟學の一般理論は挿話』たるに過ぎないものである(註九)。唯一の例外はマルクスである。

マルクスはその『資本論』及び『剩餘價值學說史』に於いて、特に、その後者に於いて、實に多大の頁を割いて、『經濟學原理』を論評してゐる。全體としての本書に對するマルクスの批評

は次の如きものである。

『彼の「經濟學原理」は、リカードウに反對して本質的には、産業的資本の絶對的要求と立法——産業的資本の生産性がそのもとで發展すべき——とを、土地貴族、マルサスの屬した教會、政府の役人と租稅消費者の利益の爲めに「有利」であり且つ「望ましい」やうな限界内に押し込めようとする目的をもつてゐた。科學を、それがどんなに誤つてゐるにした所で、それ自身からではなく、外部から、それと無關係の、外的利益から取り來つた立場に適應せしめんとする人を名づけて私は「劣等」といふ。……僧侶のマルサスは、これに反して「リカードウとは反對にとの意——吉田」勿論また「この點だけはリカードウと同じくの意——吉田」生産のため労働者を駄畜にまで輕視し、彼等を餓死と獨身生活とにまで墮す。併し同じ生産の要求が大地主にその「地代」を減じ、又は國教會の十分一税や租稅消費者の利益を傷けようとするか、或は又進歩を阻害するやうな利益をもつ産業ブルジョアジーの一部を、生産の進歩を代表するブルジョアジーの部分の犠牲とするやうな場合——従つて、ブルジョアジーに對する貴族の何等かの利益、或は進歩的ブルジョアジーに對する保守的なそして停滯的なブルジョアジーの利益が問題である場合には——すべてこれ等の場合には、「僧侶」マルサスは特殊利益を生産の爲めに犠牲とするのではなくて、彼の力の及ぶ限り、生産の要求を現存の支配的階級又は階級分派の特殊利益のために犠牲にしようとする。そしてこの目的のために彼は彼の科學上の結論を誤魔化す。これは、彼が無恥且つ職人根性的になすところの剽竊を措くとしても、彼の科學的

の劣等さであり、科學に對する罪過である。マルサスの科學上の歸結は支配階級一般に對して、又特殊的にはこの支配階級の反動的な要素に對して遠慮がちなものである。すなはち、彼は科學をかかる利益のために誤魔化すのである。これに反して、彼の科學上の歸結は、それが壓制されてゐる階級に關する限り、無遠慮である。彼はたゞ無遠慮である許りでない。彼はこの無遠慮さを氣取り、それを冷やかに楽しんでゐる。そして其の歸結が窮乏の中に生活せる人々に向けられてゐるかぎり、これを誇張する、彼れの立場から科學的に正當化されるやうな程度を越えてすらも。(註一〇)

併し乍らマルクスは、その『反動性』にも拘らず、又は寧ろその『反動性』の故に、マルサスが一つの『功績』を果したものとしてゐる。すなはちマルクスは彼れの『價値の尺度』と『諸定義』とこの『經濟學原理』とに就いて、『マルサスの三著作の眞實の功績は、彼が力點を資本と賃労働との間の不等の交換に置いたところにある。』(註一一)と書き、この點を以て彼れの『唯一の功績』であるとしてゐるのである(註一二)。

かくの如くに、『經濟學原理』の出版以來極めて最近に至る迄は、この書は、マルクス唯一人を例外として殆んど無視黙殺の状態にあつたのであるが、然るに一九三〇年代に至つてこの書は突如として多數の經濟學者の注目の焦點となるに至つた。その一二の例を擧げて見るに、英國に於いては例へばケインズは、マルサスの恐慌論に觸れつゝ曰く、

『十九世紀の經濟學がよつて以て生じた母胎がリカードウではなく單にマルサスのみであつた

ならば、世界は今日何と遙かにより賢明な且つより富んだ場所となつてゐたことであらう！』

(註一三)

これは一九三三年のことである。同年にアメリカに於いても亦、マクラクソンはその著に於いてマルサスを取上げ、マルサス經濟學の主要點を支配労働價値論、需要論、及び恐慌論——すなはち『生産力』と『消費手段』との結合、又は平衡及び比例の原理——なりとし(註一四)、この第三を特に詳説したる後曰く、

『これは十九世紀の初年の著者としては重要な貢獻を含むものである。理論と實踐との兩者が、かくも一般に、需要を顧慮せざる生産性と供給との増大といふリカードウの足跡を逐つたのは、いさゝか不幸なことである。リカードウの經濟學は、回起する恐慌と周期的景氣變動といふ餘りにも大なる不安定を除けば、實踐上長足の進歩をなさしめた。この不安定は二十世紀の最大の經濟問題であるから、有效需要と比例の維持とを強調するマルサス經濟學の「復興」にとつて時勢は熟してゐる譯である。』(註一五)

かくの如くに、最近のマルサス經濟學の『復興』は、主として彼れの需要及び恐慌に關する見解を中心として叫ばれてゐることである。そしてこのマルサス經濟學の『復興』は、同時に、リカードウ等のそれを『供給』の經濟學と呼ぶことによつて——『供給』の經濟學から『需要』の經濟學への、理論經濟學の一大轉換であると稱せられてゐる。それが事實であらうとなからうと、兎に角マルサス經濟學の『復興』が過剰生産の時勢に負ふことだけは確實である。『人口論

者』マルサスは今や『經濟學者』マルサスとしてその『王座』に『復位』しようとしてゐるのである。彼れの理論が眞に『王座』に値するか否かは、吾々のこゝでの問題ではない。最後に一言して置き度いが、私は昭和九年にこの『經濟學原理』の第一版を、世界大思想全集の一部として、松柏館書店から出版したが、時あたかも『マルサス經濟學復興』の波が日本に押寄せて來始めた頃であつた爲めか、南亮三郎教授の著書に於ける公然の御褒めを初めとして多くの人々から第二版を基礎とする全譯を慫慂された。今機會を得て宇野弘藏教授、河野與一教授、及び長谷川覺氏等の御好意と御援助とによつて、漸くこゝにこの譯書を公けにすることが出来る様になつた。その結果が餘りにも貧弱であつて汗顔の至りではあるが、この機會に右の方々に厚く御禮を申し上げ度いと思ふ。

仙臺にて 譯者

- 註一 John Maynard Keynes, *Essays in Biography*, 1933, p. 96
- 註二 Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus 1810-1823, edited by J. Bonar, 1887. 又次にはリ
カドRicardoの私書『Letters of David Ricardo to John Ramsay McCulloch 1816-1823, edited by
J. H. Hollander, 1895; and *Economic Journal*, vol. xvii, 1907.
- 註三 Keynes, *ibid.*, p. 134.
- 註四 An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated, 1815.
- 註五 The Measure of Value stated and illustrated, with an Application of it to the Alterations in the
Value of the English Currency since 1790, 1823.

註六 Articles "Poor-Laws" and "Population" in the *Supp. to the 4th, 5th and 6th Eds. of the Encyclopaedia*, 1824.

註七 On the Measure of the Conditions necessary to the Supply of Commodities, read on May 4, 1825
(*Trans. of Roy. Soc. of Lit. of the U. K.*, vol. i, pt. 1, 1827); and On the Meaning which is most usually
and most correctly attached to the term "Value of a Commodity," read on Nov. 7, 1827 (*ibid.*, vol. i,
pt. 2., 1829).

註八 Definitions in Political Economy, preceded by an Inquiry into the Rules which ought to guide
Political Economists in the Definition and Use of their Terms; with Remarks on the Deviation from
these Rules in their Writings, 1827.

註九 James Bonar, Malthus and his Work. 柳經夫・吉田秀夫共譯、序言、一〇頁

註一〇 Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert*. 『マル・エン全集』第九卷、三八八—三九九頁

註一一 同書、第一卷、二二頁

註一二 同書、二二三頁

註一三 Keynes, *ibid.*, p. 144.

註一四 Harlan Linneus McCracken, *Value Theory and Business Cycles*, 1933, p. 121.

註一五 *Ibid.*, p. 136.

後記 ホランダ・グレゴリ共編のリカアドウ著『マルサス評注』は、その編纂振りの最も杜撰にして不親切なるものゝ一つに屬する。私は餘りにも不可解な點に就いては譯者註を入れたが——その數は極めて多い——これ等の點に關して讀者の御教示を得ば幸である。

12887

昭和十二年九月一日 第一刷發行
昭和二十三年四月一日 第三刷發行

經濟學原理 下卷

定價 八拾圓

譯者 吉田秀夫

編輯者 布川角左衛門

發行者 岩波雄二郎

印刷者 小坂孟



發行所 東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三 岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

大日本印刷・田中製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。雷ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する編纂解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て奮然とする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

